第９回米百俵賞受賞

（平成 17 年 6 月 15 日表彰）

南　研子（東京都杉並区）

アマゾンの自然保護活動を続けるとともに、先住民族のインディオへの識字教育や学校建設などの支援活動を行った。

■受賞時プロフィール

平成元年、イギリスの歌手スティングが「アマゾンの森を守ろう」のスローガンを掲げワールドキャンペーンツアーで来日した際、南氏はボランティアとして参加した。この時、アマゾンの森が世界の酸素の３分の１を生産しているが、不法侵入者による野生植物の乱伐や野生動物の乱獲が後を立たず、30 年後には森が消滅する恐れがあるということを知り衝撃を受けた。「このままでは次世代の命が危うい」と考えた氏は、同年５月に熱帯森林保護団体を設立。熱帯林と野生動物保護、さらにインディオと呼ばれる先住民族の存続活動を開始した。

平成６年からは、現地のリーダーたちからの強い要望で、文字を持たない現地住民の子ども約500人を対象とした識字教育を開始。平成 16 年には、この地域の中心に位置するピアラスに、日本政府の助成金と当団体の資金でインディオ教師育成の学校を建設した。ここでは、氏とブラジル人専門家が支援に当たっており、現地住民たちは「研子の助けで、次世代の未来に光が見えたし、ジャング

▲平成 16 年に建設したインディオ学校

ルを守ることもできる」と大変喜んだ。

インディオの暮らす地域はマホガニーの群生地であるが、その木は高級家具の材料となるため、密猟者によって乱伐されていた。熱帯林では1種でも絶滅の危機に瀕すると生態系全体に大きな影響を及ぼすため、このことを憂いた氏は平成 10 年から植林活動を開始。これまでに約7万本のマホガニーの木を植林した。

■受賞後の活動

平成 22 年には養蜂事業を開始。7部族に技術を教え、平成 27 年には 500ｋｇの蜂蜜を採取した。食材に乏しい地域にとって重要な栄養源になるとともに、住民の経済的自立にもつながっている。

また、近年、アマゾンでは開発が進み、森を焼いたときの火種が地中に潜んで自然発火が多発するようになった。この状況を回避するため、南氏は平成 27 年から自然発火の消火事業に着手。14 か所を拠点として、先住民自衛団のメンバーに専門家が消火訓練の技術を教え、ＧＰＳが察知した自然発火現場に赴き消火をする取り組みを始めた。大火を最小限に食い止めるこの取り組みは大きな成果を出し、評価されている。

▲平成 27 年から始めた森林火災の消火活動の様子

氏は、「アジア、アフリカ諸国を支援する人は沢山いるが、日本から一番遠いブラジルのアマゾンを助ける人は少ない。ジャングルが無くなれば、インディオも絶滅し、文明社会も崩壊する。次世代のためにも支援活動を続けていく」と語る。

地球規模での気候変動が進行する中、地球の肺のような存在であるアマゾンの森を残すことは、重要な課題である。

■主な受賞歴

○平成 18 年　大山健康財団大山激励賞

○平成 22 年　第 13 回地球倫理推進賞、文部科学大臣賞（熱帯森林保護団体として）

○平成 26 年　第 3 回毎日地球未来賞（熱帯森林保護団体として）